



羈旅湯錄

上之卷

JL 4
3495
1



ル 3
3125
1-3

3495
1

3125
1

曲亭馬琴遺稿

坦菴幹校

壬戌
四
韜
旅
漫
錄
全
三
冊

昭和九年
十月八日
購取

川邊花陵
渡邊小華
圖畫
畏三堂梓



Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text is partially obscured by the red seal impressions.

曲亭翁真蹟

畏三堂梓

賢なること一

能くも失くしみるの誠亦復

其の心ちのりたやすらむ

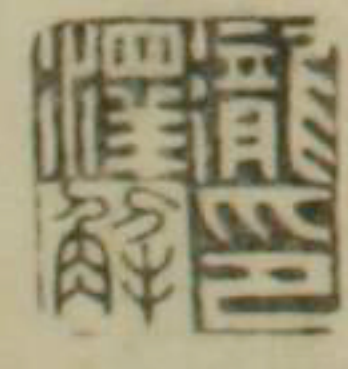
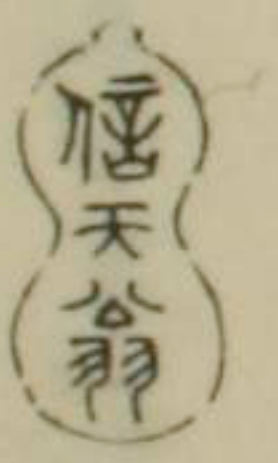
こと其の心ちのりたやすらむ

其の心ちのりたやすらむ

可貴を福をもち余を

りたやすらむ

壬申書 曲直書



曲亭翁真蹟

曼三堂

あひて ○六月七日岡崎泊 今朝吉田と出立、御油の外成と休息の夕岡 ○十一日新堀泊 半む堀の西の方の在あり ○十日名古屋泊 今朝新堀と立て名古屋津嶋の友と訪ふて津島祭と見ろ、お帰すは十六日午時又名古屋へ帰る、昨日僕らあひて、○廿六日宮泊 今晩名古屋へ出立、名古屋の友人の来會と終夜飲膳を明朝 ○廿七日石薬師泊 雨ふり大子、○廿八日水口泊 日出水はつき七月朔 ○七月二日石部泊 水道あり、故 ○三日京都の間の道と難おふと津く廿四日あり、○廿四日夜大坂 今京刻と立て堀へ著岸、○八月六日京都 昨夜大坂の出立、友人舟場まで送らる、夜の大水はこりて、晴とす、○八日水口泊 今朝立京、○九日津泊 ○十日松坂泊 ○十一日参宮 今夕松坂泊てり、○十二日

津泊 ○十三日桑名泊 十四日雨ありて舟出、桑名人 ○十六日名古屋 今朝乗船、佐屋の本陣、丁寧ありて、あさる、故は、名古屋に逗留、今夜 ○十七日赤坂 今朝名古屋と出立、帰心甚の道と仁三理 ○十八日濱松泊 ○十九日嶋田泊 ○廿日興津泊 ○廿一日三嶋泊 ○廿二日大磯泊 ○廿三日川崎泊 ○廿四日江戸 今朝無事と聞て、道といそが、僕はあへり、家内凡道中百有五日、五月九日より八月廿四日まで逗留の日數

塔の澤二日 府中六日 嶋田二日 掛川五日半 吉田七日 新堀一日 名古屋後十七日 水口三日 石部一日 京都後廿四日 大坂十日 伊勢妙見町一日 都合逗留七十五日半

崖言

一 遊歴中おの目珍らしとおえくつりの悉くれを志る
 古人の略傳○墓誌○珍書○風俗の異體○方言○妓院
 ○雜劇○年中行事の異同○名所古迹○古人の墨跡等あ
 り。序と得を一覽せむといへども。その處と探得さる。古墳
 等ハあるせふゆかり
 一 岐阜長良川の鵜船愛宕高尾四明山の石川翁石山寺二見朝
 隈三保等ハ必見るべき所といへども。或ハ道遠く。或ハ山
 高くして。炎暑またへむ。或ハ案内の友人當日故障ありて
 せむせらるゆかりに遊覽せむ。故よきとらへば。遺恨
 甚し就中あつ川の鵜十八樓四明山と見残せると。尤
 らむべし。

一 南都ハ歸路必遊覽まきと。出水ハ日數かくまき。帰心あ
 且路あれ獨行の覚束あまき。あつやぬ。

播州高砂紀州高野撰州須磨赤石等僅の道と隔あつら
 うは是洪水は路次の序と失ふ故あり。西ハ住吉と限り。

一 遊歴中人の需は應卜て作まる狂文等数稿ありといへど
 由。こつ小載せむ。別本と見。見よららハしき故あ
 り。旅中漫戲の詩歌ハ。その所を得てよと出せるものられ
 と載を。是らづら後勘は備ん為し。いととさあきこ
 ちのこおわうり

一 此書人に見せん為ふせむ。又らづら長夜の友とら
 あつねど。老後茶話の記臆。あつら駄賃帳のあつらへに
 志らせり。机上の鶏肋か。ること猶おほらむべし。

目録

○一條より三十九條までの話ハ。東海道大磯より大津まで
 のことと記す。名古屋新堀又その中よりあり

○四十條より八十七條に至る。京師の話を書きし。類より
 あらへ評するよむてハ。大坂の話もこれと混む。近江も亦
 其の中よりあり

○八十八條より百廿五條に至る。大坂の話をあつらん。京の話
 と雙評するところ前のごとく

○百廿六條より百五十七條よりつらん。伊勢及び帰路の話
 とあつらん

卷の上

- 一 大磯の懐古
- 二 蕨姑峯の雨
- 三 雨中の不二
- 四 農男附訪華寺
- 五 正雪が墳附十三佛
- 六 梅屋勘兵衛が舊趾
- 七 義元の像
- 八 駿府二町街
- 九 宇都の山
- 十 島田の川留
- 十一 小夜の中山
- 十二 紅毛人の墓
- 十三 来泊人の歌曲
- 十四 掛川の好事家
- 十五 秋葉の心
- 十六 戸守の鍾馗
- 十七 遠州訛
- 十八 吉田の花火
- 十九 吉田のめ盛附街妻
- 二十 蛸崎の出女
- 廿一 吉田岡崎の妓楼
- 廿二 とり崎の夏芝居

- 廿三 五條の山水
- 廿五 名古屋の風俗
- 廿七 甚目寺の鐘
- 廿九 名古屋の芝居
- 三十一 津島の挑灯船
- 三十三 江州の大水の附松河大
- 三十五 瀬田蜆
- 三十七 三上山附百足山
- 三十九 奴茶屋

卷の中

- 廿四 名古屋訛
- 廿六 名古屋の評判
- 廿八 繪巻物 附水滸後傳の目録
- 三十 名古屋の天王祭
- 三十二 藪子香の物
- 三十四 粟津の義仲寺
- 三十六 鏡山
- 三十八 三井の古鐘
- 四十 遊女八千代が囃

- 四十一 光慶々の寛活
- 四十三 六條郭の全盛

- 四十二 板倉侯の大量
- 四十四 傾城局の券書

四十五 烟花城書画展觀目録

四十六 遊女吉野が傳附蟹の五

- 四十七 島系の囃
- 四十九 祇園さゝか
- 五十一 きがへの譯
- 五十三 舞子の評
- 五十五 妓の衣振
- 五十七 京の女児風俗
- 五十九 祇園の方言
- 六十一 御所うら
- 六十三 総嫁
- 六十五 京師の評 附風俗の圖説
- 六十七 旅の盃 附大文字の火

- 四十八 京師の妓院
- 五十 嫖客の囃
- 五十二 藝子の枕金
- 五十四 三弦管
- 五十六 妓橋の衣々
- 五十八 祇園大接の囃
- 六十 祇園の奇曲
- 六十二 つく〜つ〜
- 六十四 四條の芝居
- 六十六 太泰のそか
- 六十八 六道の模うり

- (六十九) 老らいと
- (七十) 京の盆祭
- (七十一) 内裡の御燈籠
- (七十二) せんぶて萬葉
- (七十三) 地花すつり
- (七十四) 京の七夕祭
- (七十五) 河原のまぐみ
- (七十六) 京地の酒樓
- (七十七) 洛外の古迹 附近江八系
- (七十八) 京都の節伎
- (七十九) 京市中の喪 附名古屋 伏見
- (八十) かゝ家の札
- (八十一) 女子のぼう 附伊勢 尾張
- (八十二) 女児の立小便
- (八十三) 京師の人物
- (八十四) 粟田の御器
- (八十五) 應挙が臥狹
- (八十六) 噺談の名人
- (八十七) 淀の洪水 撞木町の吟
- (八十八) 京の浮世画 附澤庵の画賛
- (八十九) 奴の小万が傳
- (九十) 八文字屋自笑が傳 附其碩
- (九十一) 近松門左衛門が傳 附墨跡

- (九十一) 西鶴が墓誌
- (九十二) 椀久奉納の手水鉢
- (九十三) 美濃屋三勝が墓 附評
- (九十四) 遊女夕霧が墓 附評
- (九十五) 紙屋治兵衛が傳
- (九十六) 淀屋辰五郎奉納の御酒
- (九十七) 乞巧女六が墓 附評
- (九十八) 二代目義太夫が墓 附元祖義太夫畧傳

卷の下

- (九十九) 契沖阿奢梨墓誌
- (百) 家隆卿の碑 附貞祐碑の吟
- (一百一) 元和戦死の古墳
- (一百二) 紹鷗が墓 附千家の墓の吟
- (一百三) 鬼貫の傳 附評
- (一百四) 大坂市中の総評
- (一百五) 難波雀の抄書 附西鶴名残の友
- (一百六) 住吉 附難波雀の松小町茶屋
- (一百七) 松明の施行
- (一百八) 浪華妓院の吟
- (一百九) 太夫天神のかけ借り
- (百十) 俳優作術
- (百十一) 伯人の評
- (百十二) 難波新地

- (百十二) 雑波堀江附堀江一紙
- (百十四) 女子の評
- (百十六) 妓楼混雑劇
- (百十七) 帯間 糸もあふれま
- (百十九) 吾雀が鳴 附帯間亦助
- (百廿一) とだやらふ
- (百廿三) 京大坂商家の評
- (百廿五) 伏見の板泊
- (百廿七) 山田の家舎 附間山
- (百廿九) 古市芝居の音 附一身田及堤 古の音
- (百卅一) 坂和田七枝といが墨跡
- (百卅三) 其角が自画賛の評
- (百廿四) 大阪妓院の方言
- (百廿五) 堀江の藝子
- (百廿六) 浪速の夕やま
- (百廿八) 首のふが傳
- (百廿九) 総跡
- (百卅一) 妾奉公人引札の音
- (百卅四) 道頓堀の芝居
- (百卅六) 伊勢路の居風燈
- (百卅八) 古市の総評
- (百卅九) 大平が音
- (百卅三) 道の心乃權
- (百卅四) 伊勢の好子家 附人物の評

- (百廿五) 筆捨山
- (百廿七) 京名の奇曲
- (百廿九) 一目連
- (百卅一) 名古屋の十五板
- (百卅三) えせ狐の葎句塚
- (百卅五) かとう屋
- (百卅七) 東海道の音
- (百卅九) 大井川
- (百卅一) 糸根東福寺の金
- (百卅三) 平越の富士
- (百卅五) 大磯の戯談
- (百卅七) 帰庵の祝章
- (百卅六) 京名の秋雨
- (百卅八) 京名市中の喪
- (百卅九) 佐屋廻
- (百卅一) 藤川の夜行
- (百卅四) うらところと
- (百卅六) 濱松の板雨
- (百卅八) 薩陀山
- (百卅九) 衣瀬川の大名
- (百卅一) さいの河原の懐舊
- (百卅四) 名馬の足跡
- (百卅五) 遊行忌の羣集
- (附録) 旅中自戒十五箇條

目録 畢

壬戌羈旅漫録卷の上

蓑笠漁隱遺稿

坦庵居士正幹校

一 大磯の懐古

五月十日大磯の驛に泊る。まのふ用事ありて僕をば品川よりかへし。今朝京傳子より神奈川へく別る。こころいまだ旅あなまをば。こころゆめ甚ど寂寥。鴨立澤もむくの地み何らぞ。虎が石。すこよく人のまゝ。こころさきばあたまさび

祐成全盛大磯傳。千里高名虎御前。可嘆衣裳群乳鳥。只今有出女如鳶。

二 蕨姑峰の雨

十二日のあつた蕨姑峯をこゆ。今朝雨ふまじり箱根八里上流汗。騎馬越來行路安。却懼昨今舉月雨。明朝

京傳名の醒字と酉星岩頼氏通称を傳藏と云う京橋のわらうみ住むるをて自の京傳と号す翁と莫逆の友ありぬを神奈川に送りあつた京傳は文化丙子九月五十六歳をくみまうぬ

大井水漫漫

(三) 雨中の不二

十日の夜より雨ふりく。三嶋沼津原より原。岩淵薩陀山の間。一日も富士をえき。府中逗留の間も。少た士峯を賞まふよ

とまかり向あしふ。不二ありあしと

(四) 農男 附龍華寺

駿府の人の説ふ。富士ふく四五月のころ。たんに雪のほそく。宝永山の方。凹くろふ。人の形のおとく雪の。あり。少くええさるとも。あり。田子の土人りふ。農男をゆ。年ハ必む五穀熟さ

此條先校兼
笠雨終お出
色は省くべし
を翁当日の吟
ふちかして圖
さへ追加て井
せしむ小澤
この以下雨談
ふのせだるの
悉くこれ省
きぬ



田子の田植

あしとくれ

あしとくれ

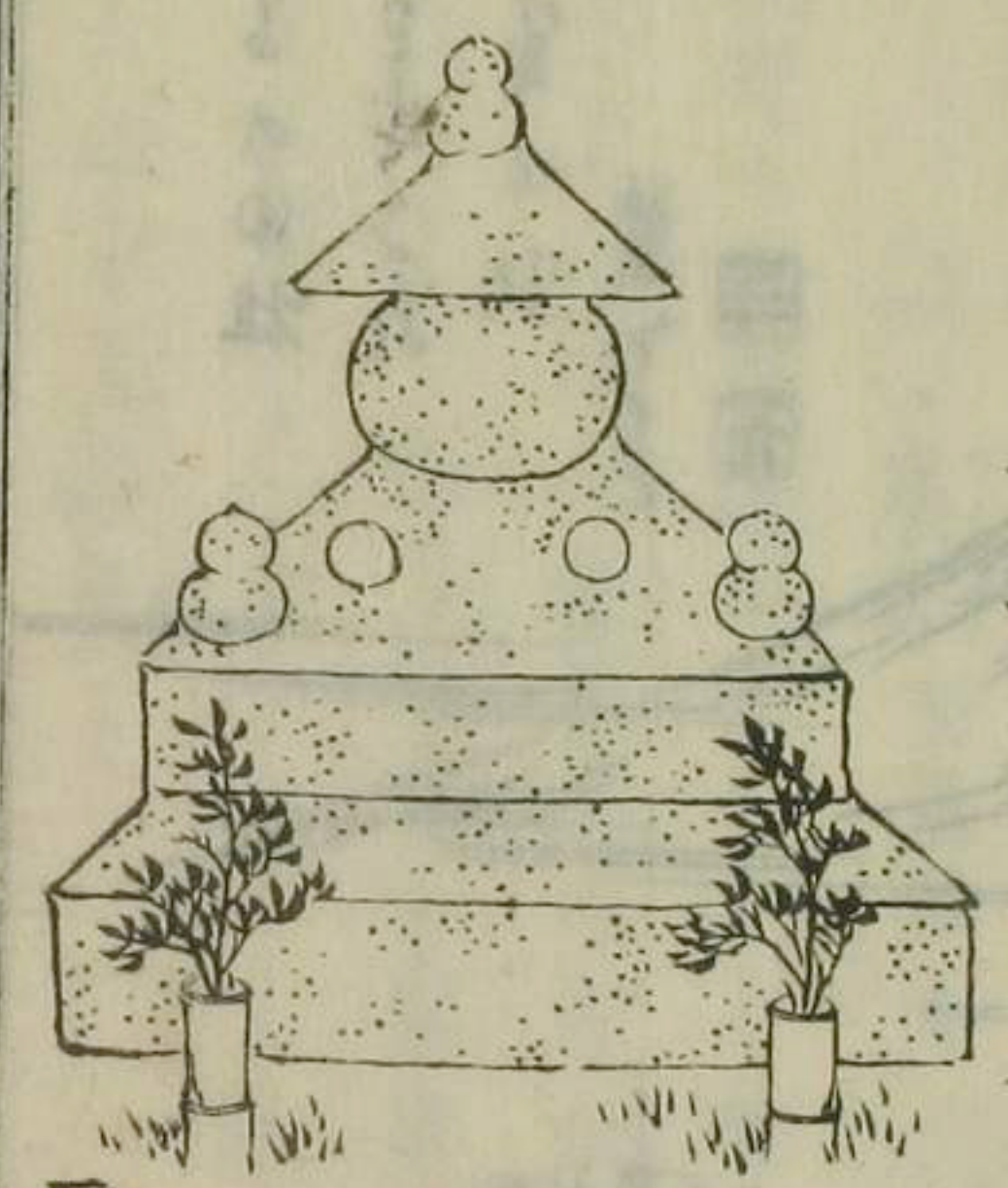
田

長三堂抄 長三堂辛

凡士峰の眺望天下第一と稱せらる。駿州有渡郡大野村府中ヨ龍華寺の本堂より富士を正面に見る。景絶景なり。清見寺に十三年よりといふ連日雨ありけむ。最ゆるぐべしやこぬ。

五 白雪墳 附十三佛

駿府寺町菩提寺墓門右のくこふ。由井白雪が墓あり。



白雪墳

かこちちあまのぬいし五輪もゆい
あくなりうりともあさ二尺五六
寸もある一墓法年月ハ滅そ
うりせりてあまのぬいし
ふは建てしりあまのぬいし

又彌勒寺十三佛あり。府中より今ハ地名あり。彌勒の十
三佛と喚ぶ。くしも正雪が菩提の爲。宮城野志のふが建
といふ。土人の説なり。くしも正雪が墓あり。尋常の石碑のど
や。ふの味の信まのあまのぬいし

六 梅屋勘兵衛が舊跡

七 義元の畫像

駿州阿部郡大岩村臨濟寺賤山の向
風の森の近地今川義元の畫像あり。
東帶 五月十九日 忌日 諸人より拜せしむ。此日雨ありけむ。予
参らば

八 駿府二丁街

駿河府中の妓院ハ二丁町とよびあそ。本名ハ阿倍川町あり。
神祖御在城の日。免許の遊女町あり。今も大おかしらへたる。

見せむ。よとせせり。故に格子の方より障子を建てり。
 嫖客暖簾をあげく。ほいすに内へ入り。籬のうたより見た
 てをなり。ゆゑ小妓をあまがけの方と正面へ居る。これヨコミ
 樓上もせやく中とむきつら。きり持。部屋の中と称する
 どの。江戸よりあそびに河岸へおこる。客一人あまがけその
 友何とよりゆびくそのぎきあ入り。ほいすのあまがけを
 妓とまねる。九ツをかきうに人の人ともあり。あまがけ
 つげおゆきとらふ。妓の詞何あんし。あまがけを。あまがけ
 言葉をつつと。多くの駿河あまがけをまじへて絶倒まこと
 多し。妓の詞お文とのまじへてとつあまがけ。らんや手が一本
 かうぞふどらふ。かうぞらふ。かうぞらふ。あまがけの
 おみでなんしよ。客「今おつらむ」。いづれゆきをなり。

硯蓋をむさろろ。藝子もつまど。是亦似て非あるもの
 なり。牽頭を郭中の米屋酒屋のまのいりの。又を郭の門
 番ふどの孩児あり。故に酒長門忠むまふどの名
 あり。六の者夜を奉公のいとちつらる。幫間をして酒
 のこ小遣錢をまじへて計をなす。幫間ハ羽言語形態胡
 蘆まじへて堪たり。甚いやあまがけのなり。二丁町の細見記の
 のや酒あまがけのけりて。あまがけの先行をそのち終り
 約れを。あまがけ一版あり。手一本とゆてたがさんかへまじり
 安永九年のまじり

九 宇都の山

宇都の山の十園子。豆粒ほどの餅を。麻糸りて十づつ
 はくぬき。五連を下うまじり。土人の説。峠に地蔵井に
 たせ給ふ。あまがけはくぬきの夢想より。十園子。板
 製。小児お服さしむまじり。万病癒とらふ。園子のかき
 数珠は擬する

みやその製ゆ
まごふる

旅駕のれづらうつふふめれありぬちりり

(十) 高田の川留

連日の雨み大井川往來あつまび。岡部より嶋田の間よ。諸
侯ちちくして。いとあぎはへり。予二十日の夕急田よ入。予が
志まる因幡をてふ家も森侯の本陣となりぬ。この家旅店
よあふれど。あふれどあまふかえの如し。よりて因幡屋の
向ひ。何ぞし源六とつる商人の家み逗留す。時くの飲
食の因幡屋より持来きて饗應しぬ。夜中驛中の繁
昌。小人の小うさふ。志なきく江戸に在るの如し。川の十
五日より廿二日みいりてをどめて明ぬ。
味ヶゆふ高田の歌みとせん。まごふるかまふまごふるのしるぬま

(十一) 小夜の中山

遠州小夜の中山夜泣の石を。日坂より十七八町をうりひが
し。山の往還より。無間山を街道より一里半をうり。掛川の
驛もつらより右のくさふとゆ。くさふとゆりんををけあふた
たらし

新坂蕨糕兒育館。由來傳世夜啼碑。鯨音斷絶無間事。大士方
便垂大慈。

子育観音小夜の峠久圓寺より。淡々嶽阿波手の神社。無間
山観音寺あり

(十二) 紅毛人の墓 兩談み出たる省く

(十三) 來船人の歌曲 上は同一

(十四) 掛川の好事家

掛川下復町の大場氏通稱大助松風亭と号すを。遠州第一の好事家なり。近來名家の書畫をわらわらと數百張。又よく客ふ待せ。所藏の書畫中よ。堂上方の寄合書。國學和歌者流の寄合書。儒者詩人書家畫工のより合書等あり。つづきも名家のよとあつめたり。古人の墨跡を猶めよめゆき。僅の扇面へ大家數十人のより合書あり。尤も志をたるとこと厚のよとむを得ぐ。その弟を蘭陵といふ。通稱忠藏書こ此人を京江戸大阪伊勢へつだ。書畫をよめよ。一國逗留半年一國逗留半年よ及びつりとぞおよそ三年あ。そのよと盡さよとよ。田舎よいめつら。き人物なり。

十五 秋葉の山

秋葉山ハ掛川より麓ふもとす。九里あり。五十町壹里あり。山中

又五十町あり。參詣の道守驛もりより兩路あり。一は山越やまこあり。甚ど難處がたあり。一は平地あり。とつづきも川多し。四十八瀬といふ。予ひしり。あどつづきもふ二十七瀬あり。霖雨霖雨の後ハ五十瀬あり。夏日を橋を。故よこの川を。く歩。又道中食物乏し。つねの旅店りやうのやとめを。甚奇麗あり。山中よか。る旅店あり。秋葉山中一町。一町よ。杉の木立宮のつら。江戸の王子の社邊やしろよ似。駿州より尾州ま。驛の十字街。或は街道かいだうよ。秋葉の常夜燈あり。この社近年りつ。繁昌あり。

つらはぬほへ。はつあ。や他名の敷四十八瀬も越。川京

夏あづらまき秋あも道ぐふ山流を解の志くも初紀

(十六) 戸守の鍾燹

遠州より三州のあひだ。人家の戸守をくわくく鍾燹あり。くわくわくらふ山伏某と名をある。たつとも何り鍾燹のこと愚按ありくわく

(十七) 遠州記

遠州より西を半元服の娘多し。白齒のむきあいたえをわく。あつなきをゆりゆき。くわくわくをくまはんと。まき字とそつくつわくと。駿州より尾州のゆひごまか志のり。就中遠州人むき多し。

(十八) 吉田の花火

三州吉田の天王すつりの六月十五日。今夜の花火天下第一

と称す大筒と称するもの立物と二本。筒の周圍數十尺。たつく櫓を組くあまを居ゆ。その外種々の花火あり大筒の例年城主よりおの機敷をうつくあまをえんる。又近國より見物よ来るものあり。鍛冶町のうら通りあひ杉の木をうる。囃子神樂あり。花火を市中よりあがるあり。この夜屋上或は簀子の下ふ。火をゆきかたりたり。火難のらまひか。是氏神の加護ふよるといひはきたり

牛頭天王の社。神明。八幡。とらふ吉田城内ふあり。六月十五日天王すつり。前夜十四日花火あり。本町。上傳馬町の両町より揚る。高さ十三間。中三間とまき立物といふ。まき立物大花火あり。火のうらぬゆらふ大金を覆ひまき。あま

火をうつき時を。そは火屋上におちり下る。又おのんく
いぬを延をうつと。その外町々の花火數百あり

十五日より田五ヶの寺院より飾山を出立。至るさきとびて古
雅をう。十四五の童頼朝を扮す。金の立烏帽子直垂太刀と佩
く馬上あり。頼朝の乳母とのり。綿帽子緋のまうま
馬上よりふろふ。す。十六人の殿原とて。棟の素袍う
くけ烏帽子あまふ。城内より走馬あり。中より重忠
と名告すとのあり。此左右よあを笠浴衣を被るとの二人
すんぢうと數百あつらふ入也。くまを笠ゆひつるこれ
よあつらふ。くは重忠を騎射笠錦の陣羽織脊お幣をさ
し領主の棧鋪の前おつら。馬上より禮をあらう。あつら
のまんぢうと投る。あまふあつらと吉事とす。す。笠と

里よりあり。大太鼓一人。小太鼓二人同衣裳よぬりうさ
とつら。覆面。あまの陣羽織小手脚當あり。さや
しあまをさゆつとを着し。さふ枕らんをつけ。同音よ
うたふ

「天皇の何佛もす。日本つもの何し神あつら。本
塩又坂名所。のまをす。こまをうらうら
たあかり

(十九) 吉田の飯盛 附衛妻

と。田のり。盛。夏を越後ち。おお。縞の前垂とけ
手お團扇をもち。夜行を。田岡崎とも。妓をくひ
く伊勢より來るりのあり。おあ。妓をのり。伊勢訛り
あり。妓席上より。三絃を鳴き。かむら。さあ。うたふ

...あり絶倒...物その外江戸ふあらぶ。京よりあらぶ。中國の風姿... 衞妻...

田をう... 崎の妓の髪... 是伊勢風...



伊勢の嶋田鬻ハ... 江戸ふち... 京ハ...

山をま... 髪をうとた... 伊勢ハ...

岡崎の出女

崎の妓を齒を染る... 近年申も... 齒を染るあり芝居あ...

田崎の妓樓

田崎四日市... 客あ... のれ必む来る...

妓ぢよ百余人あり。おんや都合みやこあひあひとてつとらるゝ。とつふ。よし田岡たがわに西。伊勢の妓ぢよ樓りゅうをある。京都きよと祇園ぎげんあり。誰たれさんさんいかに大坂おおさか新町しんまちあり。誰たれさんさんをあけでおきり申まをさつふ。とつふにちよろし。屋やのハ重おもといふあり。少すくしを顔色かおいろ美うつくあり。ひよらるゝんん價あたいより

たさく

矢別やまが橋長はしながさ二百八間にひやくはちまやまぎ川かやまぎの里ののひがしあり。水源すゐげん木曾まきぞの山溪やまのせきより落おちる。未まも驚塚おどろかづか川がの西尾にしおより。り。二流にりゅう海うみり入いる。矢やまぎ男おとこ川がとよ川の三大さんだい河があるとつと。國くにを三河さんかと名なづく。

(廿二) ざり崎の夏芝居

六地蔵むくちざうといふとつと。土用つちよう芝居しばいと名なづく。よし簞たね

張ひあ〜〜二階にがい棧鋪せんぽうあり。中山なかやま來助きやくすけの外の中芝居ちゅうしばいの俳優俳優あり。九人の外の客きやくあり。妓ぢよも客きやくと同席どうせきにて見物けんぶつとつと。あまを。狂言きやうげんハさぎぬ合戦あひびきと五人切ごにんぎりとあり。萬事ばんじ不都合ふつごう絶倒ぜつたうとつと多おほし。

(廿三) 五色の山水

三州新堀さんしゅうしんぼり西一里半在にしつりはんざい深見ふかみ莊兵衛しやべい木綿問屋きわたんやとつとふ人あり。子息しきハ左太郎さだたろうといふ。狂名きやうなを朝倉あさくら三笑さんしょうといふ。この家の納戸のうどの椽えん戸とのあり。穴あな。紙かみを一尺いっせきむのり手前てまへをおしあてて。十間じゅうかんむのり先まへの泉水せんずい草木さくぶ悉まことく紙中かみちゆうよりつる。その鮮明せんめい畫ゑるか如ごとし。五色ごしきハ五色ごしきよりつる。天色あまいろハ天色あまいろよりつる。尤なほづもささめさ。あまよりつる。予あたが見み〜。池いけハ杜若つげあり。竹たけあり。柳やなぎあり。庭にわハ小兒こぞうの手習てならひ草紙くさしばしは〜。あま〜。表紙うらじのめん字

南村輟耕錄 卷之五
平江虎丘閣 版上有一竅 當日色清朗 時以掌大白 紙承其影則 一寺之形勝 悉於此見之 但頂及居下 耳此固有象 可寓非幻出

年月すやあきゆくふよめをり。雲の追しくふりつり。又あり
申に。竹屋あはれの風よ戦ぎ池よ漣のたつおど。言語同断の
景色。理外の機關あり。主人くくくふ庭小兒を出し
見せしむる小。眼鼻衣服の模様まきまきくくく。くく
是をりの戸のあー穴より。紙一枚の内へ。方十八
間の山水。明細よくつる。蘭畫びいどろくくく。く
くの小似きり。戸せくくく内くくく。くくく京大宮くく
百姓丹羽又左衛門が納戸のあー穴よ紙をさくくく。東
寺の塔あきゆうくく。あきくくく。信州上の諏訪藥
師堂のうらの羽目のあー穴より。塔影のくくく。く
はくくく聞しが。くくく目前よ見ど。京と三河の事ハ予遊歴
の序よのあきり小見く。わりの小日さくく自然とあく

者松江城中 有四塔夏監 運家乃在四 塔之東而小 室内却有一 塔影長五寸 許倒懸于西 壁之上不知 從何來然不 常有或時見 之焉是又不 可曉也

志むるものあきく。日中くくく。くもあきく。く
世間よかきくく。あきくく。幸ふその方ふく。穴
あきく。人のつねく。く。氣のつく。ぬ
あきく。今按くく輟耕錄よ塔影のくくあり。又酉陽
雜俎よあきく似くく。あきく。異國あきく。よ
りあり。くく見えく。

(廿四) 名古屋記

名古屋人ハ。まきく。くをせく。く。コウおつせる。く
何のく。せく。く。く。仁のく。く。の
仁がきく。く。仁がやあき。く。く。く。く
ぬあり。又きんく。く。く。又きんく。く。く
く。く。く。

ふど屋ちやうり

昨日キナふよふのむんね。「転語」「當行ナリ」「我ナリ」おをせとたりり。「義ナレモ」
 人ヲ賺スヲ云「人ヲ騙ス」ちやうらうらう。「泣キ」ひきひきひきひき。「泣キ」おのろつひきひき。「泣キ」
「人ノ家婦ヲ云」人の家婦ニ間姪「出會ノ宿所ヲ云」おのろつひきひき。「コノ」おのろつひきひき。「コノ」
「コレ」コレ娼家ヲ禁スル故ナルベシ。「コレ」おのろつひきひき。「コレ」おのろつひきひき。「コレ」
 ついづい。「敢テ」おのろつひきひき。「敢テ」おのろつひきひき。「敢テ」
 た。おのろつひきひき。「不圖ナリ」おのろつひきひき。「不圖ナリ」
「ホニト云ニ同ジ」とぶらうねき。「終」おのろつひきひき。「終」おのろつひきひき。「終」
 りひあん。「腹立ノ鬼」又○「又」おのろつひきひき。「又」おのろつひきひき。「又」
「故逸ノ鬼」おのろつひきひき。「故逸ノ鬼」おのろつひきひき。「故逸ノ鬼」

廿五 名古屋の風俗

名古屋は男女の風俗。おのろつひきひき。大坂をすあぶなり。おびお
 りらげ「男子の髪」おのろつひきひき。「女子の髪」おのろつひきひき。「女子の髪」
 あらひ江戸よあらひあり。各番ハ京をすあぶなり。故ハ江戸の

戯作狂文も名古屋

戯作狂文も名古屋まといよく通ざるなり。「大坂を」通せざるなり。「大坂を」
 京の人より一「向通せざる」名古屋の女子顔色の美あるも。腰ハ大小を「腰」
 一人と細腰「細腰」あり。あき風土よゆるあや。男子夏
 ハ編笠「編笠」を蒙りて歩行を。日傘「日傘」とさくたるもあり。但藩中の
 女子のと。萬事江戸の風俗ハ異なることあり。

廿六 名古屋の評判

名古屋ハ魚肉小富たる所なり。魚町七ツ寺あどよれ酒樓
 あり。蒲焼屋と称するもの一種ハあり。種々の料理と
 するなり。蒲焼の風味。京江戸ハおのろつひきひき。硯蓋「硯蓋」も蒲焼
 やつひきひき。凡劇場の外。三絃停止なり。見世物「見世物」おのろつひきひき。太鼓の
 とたり。凡酒樓中客二階「二階」あり。男子出く酌「酌」をとる女子ハ
 二階へ上らざる。國禁「國禁」の甚しきことあり。名古屋ハ

て針妙と称するもの。三州あつた街妻と同一。これ今
 稀なり。呉服屋と水口屋繁昌あり。煎餅、岡山姿見ふと
 の家。狂言踊衣裳、屋、鼓太鼓、春田屋、浮世繪、
 駒新唐繪、月峯、紅白粉、鏡屋、造り花、吹田屋、書肆、
 風月堂、永樂屋、貸本、湖月堂、菓子、寶屋、鮎、岐阜、
 來ると。狂歌、田鶴丸、誹諧、士朗、の外、
 何と。春日遊山の地、門跡のあけ所、若宮八幡、七ツ寺
 熱田櫻の天神等なり。天神の別當を岳靈院といふ禪宗教品の
 古瓦をわつめく瓦礫舎といふ風流の蓮會
 興行、又夏日納涼の地、廣小路薬師前あり。柳の薬師の別
 當と正傳寺と
 りふ瓦礫舎の實弟ふり奇石をわつめく多く、數十軒の出茶屋、
 物芝居等あり。柳の薬師より廣小路
 の景色、江戸兩國薬研堀、鬘髻、納涼の地、琵琶島

道遠、故、水邊、廣小路
 最繁昌なり

(廿七) 甚目寺の鐘 此条も雨談に載るんが省く
 (廿八) 繪巻物 附水滸後傳目錄

名古屋、繪巻物
 一、松、繪巻物一卷 名古屋
 山崎良民所藏

勾當の内侍の作、雀の死、諸鳥の、
 ふありの、の戲作、の、の内侍、
 あ

一、福有の、繪巻物字一卷 名古屋
 鈴木甚五左門所藏

藏あり、今兒童の夜語、花咲、

邊々
 福富の、
 京、橋本、
 亮の所藏、
 せ、伝、
 望、

雀松原作者
勾當内侍
後小伊勢松
坂の友人小
津挂窓云云
の勾當内侍

いかにして後
土御門院の
時四辻季春
妹の撰
筑波集の作
者の内才女
の筆ある
勾當内侍
才女あり
聞ふこと云

福有長者のいふ似たり是より出たる話也
一花鳥凡月 繪巻物一卷 名古屋
柳下亭所藏

一天狗の内裏 繪巻物
あまの先年名古屋の道具屋よりありてしるす
人々との行かん次の日問ふようきりつとつひとを名
古屋人ともしるすあり

一國姓爺後日 義太夫本近松作大字繪入
柳下亭所藏

一美本繪入三國志演義 柳下亭所藏
らねいしつりもつりてそのをり予と逗留中珍書と
つりあつてあらねど古本をもつり構ゆ

又名古屋廣小路秤座守隨の藏書よ水滸後傳十卷あり主
人としるす人よるせびり柳下亭より就くその目錄とらるる

○水滸後傳

古宋遺民雁宕山樵編輯
金陵愁客野雲主人評定

- 第一回 阮じゆん統制梁山感舊 張幹辨湖泊尋災
- 第二回 毛孔目横吞海貨 顧大嫂直斬豪家
- 第三回 病尉遲間住遭殃 樂廷玉失機入夥
- 第四回 鬼臉兒寄書羅禍 趙玉娥銜色招奸
- 第五回 老管營賽遭横死 撲天鵬冤被拘囚
- 第六回 飲馬川李應重興 虎峪寨魔王鬪法
- 第七回 李良嗣條陳賜姓 鐵叫子避難更名
- 第八回 萬柳庄玉貌招殃 寶帶橋節婦遇故
- 第九回 混江龍賞雪受祥符 巴山蛇截湖徵重稅
- 第十回 墨吏賠錢受辱 豪紳飲賄傾家
- 第十一回 駕長風群雄圖遠略 射鯨魚一箭顯家傳

第十二回 金鼉島開基殄暴 暹羅國被囚和親
 第十三回 救水厄天涯逢故友 換良方相府藥佳人
 第十四回 安大醫遭諛避跡 聞參謀高屋留客
 第十五回 大征戰耶律奔潰 小割裂企弓獻詩
 第十六回 潯陽樓感舊題詩 柳塘灣除兇報怨
 第十七回 穆春喋血雙峯廟 庖成計敗三路兵
 第十八回 黃統制遭枉陽山 焦面鬼謀妻落井
 第十九回 納平州王輔招兵 逐強徒徐晟奪甲
 第二十回 賣揚劉村汪豹累呼延 失保定朱仝投飲馬
 第二十一回 李應火燒萬慶寺 柴進仇陷滄洲牢
 第二十二回 破滄洲義友重逢 困汴京奸臣遠竄
 第二十三回 喪三軍將材離火宅 演六甲兒戲陷神京

第廿四回 獻青子草野全忠 贖難人石交仗義

第廿五回 折王進小乙逞雄談 救關勝大名施巧計

第廿六回 逢天巧荒殿延英 發地雷寺基殲賊

第廿七回 渡黃河叛臣顯戮 贈鴿酒奸黨凶終

第廿八回 橫衝營良馬歸故主 鄆城店小盜識新營

第廿九回 還道村兵擒郭道士 柴髯伯義護美髯公

第三十回 聚堂雲兩寨朝宋 同泛群雄碎地サノ同義友日本

第三十一回 國主遊春逢羽客 共濤謀叛遇番僧

第三十二回 慶生辰龍舟見競渡 篡寶位綺席進霞丹

第三十三回 頭陀役鬼燒海泊 李俊誓志守孤城

第三十四回 大復仇二兇授首 議嗣統眾傑歸心

第三十五回 日本國興兵構翼 青霓島煽亂殲師

第廿六回 振國位勝算平三島 建奇功異物貢遐方

第廿七回 金鼇閣仙客留詩 牡蠣灘忠臣救駕

第廿八回 武行者僧房叙舊 宿大尉海國封王宋ヨリ李俊スニヤ
合目ニ封スナリ

第廿九回 丹霞宮三真修静業 金鑾殿四美結良緣

第四十回 荐故歡燈同宴樂 賦詩演戲大團圓

以上四十回目錄畢

卷中人物。印ハ星外ノ英雄△ハ星中英士ノ子孫□印

ハ李俊ト同盟ノ人前傳ニ小集義ト云ニアル

人ナリ□印ハ暹羅國ニ止ラヌ人ナリ無印ハ

星中ノ豪傑ナリ

李俊シヤムロノ王トナル 柴進シヤムロノ丞相トナル 公孫勝

辞シテ山ヘカヘル 李應 蕭讓 燕青 樂和 蔣敬 王進

樂廷玉 扈家庄 軍法ノ師 朱武 樊瑞 關勝 孫立 呼延

灼 朱仝 黃信 扈成一 大青ノ兄ナリ 阮文七 斐宜

戴宗 鄒潤 穆春 杜興 楊林 聞煥章 コノ女ヲ立

テ俊ノ右トス 花逢春 花榮ノ子ナリ。シヤムロ國王ノ女

ニ戀シテ附馬トナル。初メ逢春シヤムロヲ伐レトキ。公主

櫓ヨリ逢春ガ美少年ナルヲ見テ密ニコレヲ戀フ。李俊シ

ヤムロ王ノ爲ニ。共濤等ヲ亡シテ後國ヲ逢春ニユツラン

ト云。逢春シタガハズ。衆オシテ俊ヲ王トシ。逢春ヲ附馬ト

ス。コレ俊シヤムロ王ノ爲ニ。逆賊ヲ亡シタル功アルヲ以

ナリ。○ハシメ共濤。企叛シテシヤムロ王ヲコロシ。位ヲ篡

ノ片。李俊一人シヤムロニアリ。依之俊兇兵トタ、カフ。共

濤日本國ヘ救ヲ乞フ。日本關白。三万ノ兵ヲ發シテ來リ救

フ。コノ回ノ評ニ云。關白ハ官爵ナリ。関氏ノ人ニアラズ云々。關白ノ兵来ラザル以前。共濟等首ヲ授ク。コノヲ以テ李俊勢サカンニシテ。日本ノ兵ヲ敗ル。關白ノ兵船。大風ニアフテ。ソノ終ヲシラズ。文中關白トノミシルシテ。ソノ姓氏ヲシルサズ。コノ作者明末ノ人ナルベシ。故ニ關白ノ名ヲ聞ク久シ。依テ大將ヲ關白トス。胡蘆スルニ堪タリ。柴進ヲ丞相トスル條下ノ評ニ云。進ハ宰相ノ才ニアラズ。然レモコノ人名家ノ子孫ニシテ。又德行アリ。故ニ衆人オシテ相トス云々。

- 宋安平 宋清ノ子
- 呼延銓 灼カ子
- 徐晟 金鎗子 徐寧ノ子
- 宋清 凌振
- 安道全
- 金大堅
- 童威
- 童猛
- 費保
- 高青
- 猊雲
- 狄成
- 孫新
- 顧大嫂
- 皇甫端
- 蔡慶

武松 武行者ハ。シヤムロニ至ラズ。寂期ニ群雄ノ忠義ヲ論シ。宿大尉ニ請フテ。李俊ヲシヤムロ國王ニ封ズ

以上四十七人

この書倉卒あつてあまよひあり。故ニその目錄を抄出して後勘ふ備ふ。水滸後傳の二本あり。共小今世ニすれかり大坂の國瑞の活。予崎陽ウキヨあり。日。水滸後傳を得たり。そのろろを小説よりろろをありき。價廿目。そのろろかへる人小やりぬ。今ありつがむお堪たり。大坂還留中。書肆ニ水滸後傳の二本あり。その名をどれぞらぬ虫肆多し。江戸あてもたつてその虫をみる。かゝり水滸後傳二本あり。一本ハ四才子傳の評をせし。天花翁の作ありとのふ。予のゆゑとをせむ。

退書
伊勢松坂の友久殿村位五平近ころ京師にて水滸後傳を購得たりとのふ享和中予屋張名古屋の安舎あつて一閱せりとも倉卒の際ゆして多く忘まじりたりて借覽せしやあつてむのひろまじりけりけりけりて附し庚寅三月廿一日右の書全四十

同十冊嶋屋より分来る。佐五平の藤齋と号し、松坂の豪富より本居宣長の門人と和歌と嗜み又和漢の稗史を好む。百十里外に在る書を貸そ交は多く得たり。

成 華 芥 漫 録 卷 之 上 三 堂 村

馬琴按さる。寛永年間。山田仁左衛門といふもの。暹羅國へ渡りて登用せらる。大國の領せしとあり。その事。智原五郎ハダ暹羅記事ふらる。そのもの水滸後傳の作者。粗山田仁左衛門ダ事と傳へし。李俊がことと撮合せし。あや仁左衛門ダ暹羅國より奉納の繪馬。駿府の浅間の社あり。近属本社回祿の時。可繪馬と焼し。其寫し神職の家にありといふ。

再按さる。山田仁左衛門ダ事ハ。唐山あく水滸後傳の作あり。より少し後あり。かの書は撮合せし。いあらざるあり。余ダ考別記あり。今亦贅せば。

(廿九) 名古屋の芝居

名古屋の芝居ハ。橘町と大洲あり。志ざらく中絶し。又近

年免さる。竹田からり名代あり。俳優者九人の外を免さる。予ダえり。一時藤川八藏。中山一徳。松本よね三。中山文

五郎。市川甚之助。國藏才子中等して。金ダ潤の狂言あり。切

狂言。米三ダ無間の鐘評判あり。米三ダ始終評判あり。ハ

月。至り。兵太郎。歌右衛門。叶。眠獅。雜介弟あどらる。ト

ハ大洲の芝居あり。二階棧敷を。又辨當ハ腕膳あく運ぶ

と禁む。故ハ食物を。七寸位の重箱小入して運ぶ。あり豪

家見物の前ふる。重箱をつまあげ。えらる。又茶

菓子あどらる。の。悉く十四五歳の童なり。茶のらん。菓

子のらんといふ。返言語甚と野鄙あり

木戸は繪看板あり。板は俳優の名を書つけらる。と。幟のとな

り。名古屋の町人ひのきの俳優へ。あらそく水引をゆるし

壬 壽 衣 漫 録 卷 之 上 三 堂 村 十八 長 三 堂 卒

桃色の木綿に墨を塗り進上某丈の文字をぶら付書よしたる
出来合の水引もあり

(三十) 名古屋の天王祭

名古屋天王祭の車樂を車二輛を組あせ上り山を飾る。
鉾ふし車を大ある地車あり。大八あり。牛をつけど。大
ある綱二筋つけく。數十人あせひく。車樂の欄干はろぬり
あしをくか物又立派あり。四方は狸々緋。或は天鵞絨に金絲
のぬむものしたるきまをさげく甚ど奇麗あり。上あをひら
く。のり人形をおく。その人形拍子にあせせてまわりの機關
あり。笛。太鼓。つづも。あゆんぎりあり。拍子。祇園をやりあり。警
固を上下を着せ。袴羽織あり。船鉾を京のうつりなりとのふ。
伯樂天。上陵王布袋。子人形の壽老人。上布袋の車樂は。から

子の人形前より立筆をとりく文字をかからりみく。甚ど
手際あるりのふり。凡車樂七ツをかりも何るべし。十五日の
夜試樂。十六日未明より城中へ引こく。日暮てかつる。車樂は
挑灯數十張をつけくいとまねやあり。四月十七日東照宮の祭
と名古屋堀川の向ひに鷹のの多く居る所あり。此所にて
その記をのども。六月天王祭のまへ十一二日頃より。その夜
のろくの俄をみる。或は大あるもんぎりの桶をかた。その豆
壺廿八文と書たる札を出し。その側は延を敷。數十人丸裸
より。尻の方を上よむけ。うつむけふあり居て。その豆の
たちふ似せ。人をさらひせなり。香より五ツをさす。あう
ふかぐりある。又一人家數十軒をうちぬり。門毎は大なる桶
と横よあせ。底をぬけて目ぐ糸の如く。鹿ある山川草木と

あやしく造りあはくその上ふ七八人さまあぐりうのぞち
て。何やほり看板の人形の丁くえせる。うきも五ツさすまの
身うどかゝもせぬ。さて桶の穴より内をえまむ。向ひハ隣塚
の垣ふど引まらひ。廁物置も脇へ引く野原の丁く十一。曠々
たるふよ。数十人忠臣藏夜討の体よつでたちくすくび居る。
のぞねかららう俄ふり。警固のりけい上下を着てのくら
む庇ふあらぐり。この外毎夜さまあぐの俳優をなす。昼を崩し
たる所をほくろひ。夜をくまよりあぐらふかる。その体甚ど
のぞぐり。又七月盆中。名古屋の市中。小児ちひさなる万度を
作り。太鼓あはくまゆへりく。あまを梵天と名づく。大人もろ
ちあぐりて種々の俳優をあまのいふ。名古屋の天王祭宵宮小
家々温純を製する恒
例ふり此地うどん
ちあまのいふ

世一 津島の挑灯船 此條雨談ふくすくられハ省く

世二 藪小香の物 右よ同

世三 江州の大水 附攝河大水の噂

六月三日より雨あはくす。暑気甚し。廿五日より雨
少くあまらう。近在まか雪も予ハく時名古屋よあり。廿
七日の朝乗名四日市辺。朝四ツ時頃ゆで雨ありやうやれ
ど。宮をまきまきあうぬ。宮と嶋見よ一兩年前よりのりやうやれぬ
あまらう。吉田から寄るハ似ぞのつきも醜婦ふり
名古屋人こまきとありぬと渾名せり。故棲
りあまらう。旅人ハその旅店へもあまらう。廿七日小宮より乗船。この夕
石薬師泊り。明朝より大雨。廿八日水口よ泊る。この夜まら
大風雨。廿九日の朝横田川水口より二里餘。すぐのりく。水す
て渡りあまらう。せひまらく昼頃又水口へ引くせり。餘の旅人
を横田川の川端いづこかの所の建場茶屋へ泊るやうをな

まど。予ハ人足の都合何〜々も泊らむ。その夜大水。水口田
 所へい床上四五尺水はく。驛のうら手の田畑一面は水お
 来り。えらうち五六人溺死す。予ハ驛の中程鈴鹿屋といふ旅
 店より。こた所を高くす。水難か。いづ〜の十二軒あ
 まり。今日いづ〜建場茶屋へ泊りふむ。むか〜水
 中の鬼とありべきを。運け〜一命をひろひぬ。いづ〜泊り
 人〜竹〜土地の人をうらふ大竹藪
 あり。この竹よ〜をなま〜とらふ。あれふより〜一両日水口
 は逗留す。七月三日の昼頃水口と〜石部に至る。此間所
 々堤崩れて田畑をお〜崩〜街道を古松倒も碌々〜と
 足を入る。の地お〜横田川あ〜

こら〜もた〜と知りあふり大事の命す。つらひつ
 澤智のつら〜渡る横田川あ〜遠くまぬあ〜の

洪水お家を流さる。た〜道路は蹄哭〜。或ハ太鼓をすら
 して人足をか〜あつめ。堤を修復〜。水死の骸を〜ぬ。さ
 らの感哀〜を龜をい〜め。横田川を〜
 り〜二十町を〜牛を牽く田畔より来るものあり
 この牛脊の上は泥つき〜。腹は細〜その聲悲〜。その人の云。
 是にてば〜所のあるが。洪水の〜ひら〜牛は
 飼ふべき〜。故は石部の在ふ人あ〜牛とあ〜
 ぐ〜予この牛を〜梁の恵王の仁を
 おり〜程お〜石部より〜。草津驛洪水を〜家
 流は人死す。故は昨今往來か〜。より〜今日石部は泊
 る明日徑あ〜。案内を〜石部を〜。艸
 津までのる。堤崩れ家流〜。す〜駭然〜。草津の驛の入

ロヨハ膳所より役人詰居く。人を通さざ。より近在へ水見廻よゆく體ふもな。驛の入口より左りへきまて。田の中を行くおと十五町むり。水高りてひき。長き竿と杖と。一歩いたりて一歩をひき。互ふ聲をうけ。うらあてり。さる餅の前へ出たり。是より陸地あり。問屋より表通りの家八九軒あり流うら海りも人家多くあがれ。四五十人も溺死。死骸を積り累々たり。さるのさる。森山彦根。又大水家流も人死。予荷を持する人足も死。りつ。十町むり流きたり。志する人の家の二階へ流きた。さる二階よ這ひあが。一命をたす。阿波疾この時あち川よ居たす。守山の洪水よ。胴勢食物乏。難義。只囂々として東

西に話のとなり。大津も驛の入口を。水つ。石橋あど少く損。逢坂山を山中大崩へ。街道の山少崩。一兩日馬を通さ。

あさきせせはあちの秋の水

三日の夜京都木屋町の旅宿へ。つきて。河原茶店の腰かけ等。涼も。さる七日の大坂への通路も。只攝州河州洪水の風聞。四日の朝角倉家中森氏の話。余きの伏見。伏見豊後橋中書嶋等を。二階より船よのり。淀の城の堀の屋根少。大坂天神橋その外橋五ヶ所落。通路を

けを治定あつてとつり。今日清水ふのぼり。伏見の
 うを眺望さふ八つと山崎邊水一面あり。只真白みえ
 申。四五日程より大坂の通路あり。その野堤ききて河内
 へ水お入。水損の農民を道頓堀の芝居へのあられ。大坂
 中の豪家或を一町く組合て施行を出す。或を米五十俵銭
 百五十貫文。或を單物五百。繻絆千枚身上の分限より差
 あり。元攝河の水損百二十餘ヶ村ありといふ。十人をもて語
 るべし十人大同小異あり。只一よりあきまるとのい大坂の
 施行の。宗治大洪水宇治の落橋姫の社流と。奥聖寺
 平等院大荒れなり。八つと山崎邊を水十八日ひく
 七月十日頃大阪より京へ東の洪水を告來るとの文よ云

六月廿七日八日大風雨忍領熊谷土手二百間許一ヶ切
 込又一ヶ切八十間餘切込夫より東の方幸手栗橋近在方

關宿權現堂切込奥州海道中山道今五日迄往來留所々家
 流も水死人あり江戸本所北川筋三圍秋葉込出水往來凡
 五尺程相州戸塚込近在方大水六郷川廿八日より二日朝
 まで留る馬入川廿八日より四日まで箱根三枚橋落大井
 川廿八日より八日己之刺まで留り鈴鹿山崩もて馬荷通
 り廿八日大雨廿九日大風雨辰己の風つよく八王寺青
 梅込甲州海道往來留る洪水のちや來候
 又同状よ六月廿五日大雷よく大風雨あり出し廿八日大
 風雨大水西國橋残り永代橋大橋新大も落る朝日天氣
 二日共上州下總常陸相摸込通路一向をり屋江戸本所
 込昨日の内段々水より床上三四尺四五尺も附中候葛西
 領二郷半領上州桐生込家流も千住通奥州海道のち通

路無之相知不申徒の註進状

又近在水損の農民を馬喰町の明地へ小屋つけしをこれへ
入おのりせ上より施行ありし程是は程より

予を古郷のり覚束なく。又江戸みくも道中出水の事と時及
びおバ。さぞ案じ悩なやむるなりめと。京へ着とその中、状をさめ
引つづけて三度出ー々もが。川留めく速よふとぞあは。よりく
七月十五日小四日出の状とたしよ。又江戸より出ーたる
状も。八月三日の朝大坂へとまきぬ。この間の心痛をわく学ふ
ほくがさし。さしぬふ旅ちりのうたよのあふに。獨行と云
あくる天寢小あぬぬも。只日夜腸を断きのゝ行んとまると
道なく。かつらんしきるふちやさか。家ふおきふれりのを残
し。長く旅中よあまび。一日も猶三秋のど。晨よ夜よ忘る

るひきふく。あしんふからしむる時もお。行脚頭陀を一身の
うくの風流かり。それも君おはくく遠行。或を軍旅よあ
たのあ。遠征さる身あ。あらば。思ひう申ぶきるもあらん。
我只風流の爲よ長旅を歴んしとも誰が為ぞや。世よ子と云
ふのもたぎる人も。さ情をあらがく。古人世を金馬門小
避く。風流ハ俗塵中ぶぢんちゆうもあらば。老るる親のときあは兒の
あらん人あ。山川の遊歴をわがみだうらば。すく遊と
いふ。さ。さ。か。隈もあきを第一の奥とま。つひおとの
おもつ。何のたの。さ。あらん。子をた人のゆあをまけた。
遊興歡樂よ何も昨日も。妻子のとも忘るるといふ。妻のりい
忘るても忘るるん。忘るるらたの子のりあり。美味をくつ
子をおりひ美服をくれ。子をわりの。我人愛情のつひあはし

翁の伯兄名
興言臺右門
と称し東園舎
羅文と号す
仲兄名興春
初右五門と称
し克巳其難忠
と号す

つやや子を衣袂とらして旅もまきまきおのり古きと
旅もろもほろろふらり古のいゝ恋もさふつものかきねま
家兄世小のつやをかりし日を常小往来し風流の夜話よあけ
まゝも。今をさるゝの秋空もの。うりあきたまふらり得らん。これ
も旅中袖をうらふほろろ一つあり。おのこ九歳の春父よわらま
十八歳の復母なかりたまひ。十九の秋兄をうらあひ。只家
伯ありたる人。近きこころは藩中よおとせられ。こころを父と
も兄ともかゝつた。兄弟とのこのむ所もたがまじ。兄も誹諧
をのこも。才器とはたかぬのまにまきわたり。あまさへ寛政十
年の八月。四十の秋の月をえ給ふ。黄泉の客とありたまひぬ。
残るものゝ妹あつりの。こころの詞をたてしむる。まのれ
ああらま。おのこ元より佛の道ようとしつゝも。紀の國高野

山ふさうづる記志のねとけりぬを。この洪水よるさるられ
る。つひふさうづるぬ萬事の殺風景。まのこふあらは

世四 栗津の義仲寺

江州栗津義仲寺のませ塚を。碑の銘あり。義仲の墓ハもる
う後よ建てるものことあり。

せはれおのこをひちまはせむらうけ

世五 瀬田蜆

瀬田の蜆汁を。醬油のまを。吸物あり。塩梅まららるるべ
らむ。

世六 鏡山 附源五郎齋

近江の鏡山ハ。石部のこま。平松川辺より右ふ高くえぬ。山
色班々として白銀の如きものあり。雪の消残りたつて

八月御年二十
六才七歳
ゆゑ

戊戌 羈旅漫録 金

卷之八

いゝ。家兄羅程（家兄羅程の文の話）の八の宮歸洛（八の宮に歸洛した）たすひぬ。

壬戌 羈旅漫録 卷の上終

